
柱のない家

B型Rh +

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

柱のない家

【Nコード】

N 8 1 8 3 M

【作者名】

B 型 R h +

【あらすじ】

とある中学校の野球部員である佐野恭輔と大宮剛は、同じく野球部員でエースの橋上健太郎に「同じ高校に行こう」と誘われる。野球ではかなりの実力者である健太郎の誘いに乗る二人であったが、そこに思はぬ運命があった…。

プロローグ（前書き）

野球を題材とした文学として、専門用語を使用することになると思いますが多少はご容赦ください。

プロローグ

真新しい校舎、そのエントランスでは今、まさに合否の発表が行われていた。俺たち三人が受験したこの県立倉浜（くらはま）高校は新設一年目、つまり合格できれば記念すべき第一期生となる。なんでわざわざそんな高校を受験したかといえば、これにはちょっとした「理由」がある。

中学時代、俺たち三人は野球部に所属していた。まあなんだかんだ有名にもなったんだが、直接関係はないのでいま語る必要はない。「理由」はもつと単純だった。

季節は秋。引退から二ヶ月後の十月。「理由」は突然やってきた。

「学校が終わったら校門前で待ってる」

俺と、同じクラスで元野球部所属のキャッチャー、大宮剛（おおみやごう）は伝言で呼び出された。野球部の後輩を使って伝言をする奴など一人しか思い浮かばなかったが、剛は違ったらしい。

「恭輔（きょうすけ）……どうしよう」

などと落ち込んでいる。不良に目をつけられたとでも思っているのだろうか。で、恭輔ってのは俺の名前である。名字は佐野って言うんだが、そこも重要じゃない。

「あのなあ、こんなことするのは健太郎くらいのもんだろ？」

今は怯える剛を見てふざける場面では無いようだったので、真実であろうことを伝えてやる。

「ああ、そうか」

剛は合点したようで、うなずいた。そして続けて言った。

「健太郎なら十分あり得るな」

健太郎。橋上健太郎（はしがみけんたろう）は野球部のエースピッチャーだった奴だ。野球選手としては拔群だったが多少性格に問

題がある。何を言い出すのやら。まあ、今は待つしかない。

放課後。健太郎は待たせると怒るので、剛と校門に急いだ。到着したが、そこに人を待つ影はなかった。予想はしていたし、こうなるように急いだのだから計画通りだ。おそらく十五分は待たされるが、それより奴が先に到着することが厄介だということは、俺も剛も認識済みだった。待つことちょうど十五分。後ろから声がした。
「よう。俺だ」

本当に十五分遅れで来たそいつはガキ大将のように笑った。実際、ガキ大将がそのまま成長したような奴なんだが。

「で、何の用？」

と、聞いてやると、

「え、まず驚かないの？まさか……、とかないの？」

……ある筈ない。だが用件を早く聞き出すには、

「ああ、内心びっくりだ。まさかお前だとはな。で、用件はなんだ？」

こう言うのがベストだろう。

「よっしゃ。で、用件だったな。俺たち三人で倉浜高校受けるぞ」
は？それが第一印象。確かに中学時代のチームメイトが示し合わせて同じ高校に入るのは珍しいことではない。しかし、くらはま？そんな高校あったっけか？

「それ、どこにあるの？あんまり遠いのは嫌だな」

空気化していた剛が尋ねる。

「この学区に今年からできる新設校だ。剛の家からならチャリで二十分、恭輔の家からなら三十分ってとこだな」

ほう。まあ許容範囲である。それに先輩関係を嫌う健太郎ならば新設校に行こうというのも分かる。しかもこいつらとなら、本気で甲子園を狙えそうな気もする。だから、

「分かった。やってやろうじゃねーか。なあ剛？」

返ってくる答えは分かっていた。

「ああ。もちろんだ」

その答えを聞いた健太郎はニツと笑い、

「倉浜でいくぜ甲子園！」

と叫んだ。

それが「理由」。だから間違いなく、三人での合格が必要だった。合否の発表方法は個人情報がなんだかんだということで、封筒で渡されるらしい。最初に封筒を貰ったのは剛。剛は三人の中では一番賢かったので、問題なく合格。次は俺。新設だけに倍率もなかなかのものだったが、なんとか合格。最後は健太郎。頭は悪くないのだが、行動がバカなので俺は心配だった。それは剛も同じなようで、180センチ以上あるはずが今は小さく見えた。

「健太郎、早くしろよ」

剛にはもう余裕がない。それを見た健太郎は封筒からスツと紙を引き出した。刻まれていた文字は……

不合格。

「……………」

「……………」

「……………」

誰もが言葉を失った。目眩がする。一秒流れるのに数時間かかっているような絶望感。もはや言いだしっぺがどうとか言う力さえない。しかし一番辛いのは健太郎なのだと思います、一言かけてやろうと健太郎の方を見ると、その表情は無だった。次第に暗くなっていくのかと思いきや、何かを思いついたようにパツと明るくなった。

「どうした？」

思わず訊いていた。

すると、健太郎は

「落ちちまったもんは仕方ねえ。俺はたった今目標を変えた。お前らの分もだ。俺は違う高校でお前らを倒して甲子園に行く。だから

お前らは俺を倒して甲子園に行くことを目標にしゃがれ」

と、宣言した。理不尽極まりないが、同時に野球選手としての自分に火が灯るのを感じた。

「しかたねえ。次ぎ会うのはグラウンドでだ。」

と口走っていた。

そうして俺たちの高校野球生活は前途多難に始まりを告げた。

謎の関西人、神田凌。（前書き）

作者は関東人なので、関西人に妙なイメージと憧れをもっているかも知れません。多少は目を瞑ってやって下さいな。

謎の関西人、神田凌

入学式。気がつけば、一時間以上座っているみたいだが心ここに
あらずの俺にとってはあつという間だった。

「あいつ、大丈夫かな」

式中考えていたのはもちろん健太郎のことだ。あいつはその後、
公立高校の二次募集に応募してなんとか藤崎西高校（ふじさきにし）
に合格した。それ自体はよいことで、野球部も有名で公立強豪校と
いう評価を得ている。しかし、心配なのは性格による問題である。
小学校からあいつを知っている俺は耐性ができて、かなりわがまま
だけど本質的な悪人ではない憎めないやつ、という境地に至ったが、
少しでも荒っぽい先輩がいればすぐにトラブルを起こすだろう。

「暴力事件で退部。とか勘弁してくれよ……」

と呟いて解散、クラスに戻るように。という指示に従う。

そう、高校初日から呆けている訳にはいかない。剛とは別れたが、
クラスに乗り込んでやろうじゃないか。野球部を作るにはあと7人
必要なのだから。

四十人弱が詰め込まれる教室には入学式を終えた生徒が流れ込ん
でいた。出席番号に合わせてそれぞれの席に座ろうとする中、ひと
り異彩を放つ男が、いた。

「よろしくな。俺は神田凌や。大阪からきたんやで」

坊主頭のそいつは周りの人に無差別で関西弁攻撃を行っている。
悲しきかな、神奈川県民たちはそれを防御する術を持たなかったよ
うだ。が、ここで助け舟がきた。担任と思われる小柄な若い女性が
入ってきたことで立っていた少数の生徒が席に着いた。最後にあの
関西弁男が余った席に腰を下ろしたところで先生は自己紹介を始め

た。

「はい、こんにちは。私はこのクラスの担任の日暮里帆（ひぐれりほ）です。一年間よろしくね」 定型文を語り終えた日暮先生は、安堵しているように見えた。よく見ると結構美人さんだ。美しい、というよりかわいいの方が似合うタイプだが。

「せんせー、彼氏おんのー？」

初対面で生徒が先生にまず聞かないセリフを関西弁男が聞く。

「ご想像にお任せします」

…… またしても常套句で返す。練習の痕が伺えるな。なんだか意味もなく残念だが。

「んじゃ歳は？」

「ヒミツ」

「スリーサイズは？」

「ヒミツ」

なんとも詮なき会話である。しかし関西弁男は諦めない。

「身長は？」

「155センチ」

「血液型は？」

「O型」

どうやら方針を変えて答えられそうなものに絞ったらしい。そして答えられるものを準備している日暮女史……

「……で、歳は？」

「24」

………

笑いは、一拍置いてやってきた。初日のホームルームからこの展開は予想できなかった。こんなに盛り上がることも、担任をテクニカルノックアウトする奴がクラスにいることも。

日暮先生は一本取られた後切り替えて、皆さんも自己紹介しまし

よう。と提案した。何故か初日からまとまったクラスは、流れるようにそのイベントを受け入れた。

先生は名前、出身中、趣味、一言あれば。というお題をだした。それに則り、地味な自己紹介が続く。やがて、クラスが意味もなく期待するあの男に番が回る。

「神田凌。カミサマの神に田んぼの田、それに凌ぐ（しのぐ）で神田凌や。大阪府立境（さかい）中学校出身。趣味は野球や。んで一言な。美人教師が担任でマジ感動したわ」

野球、といったな。確かに。これなら俺の対応も変わってくるというものだ。そして俺の順番。

「佐野恭輔。横山市立矢島中学校出身。野球部作るから経験者は気軽に声をかけてくれ」

短い演説だったが効果はてきめんだった。関西弁男改め神田は俺に興味を持ったようだった。

「佐野クンやつけ？野球部つくるんやろ。俺も入れてーな」

放課後そうやってきた。まあ狙い通りだ。

「ああ頼む。人数が集まるかもまだわからないからな」

「そうなんや」。ま、俺には期待してくれてええで」

お喋りで実のない男だが、野球人としてはどうなのだろう。本人が期待しろと言っているのだからそうしてみるのもまた一興だろう。

「また明日」

剛をクラスに待たせていたので、神田に別れを告げた。

「ほなな」

剛のクラスには神田を上回る驚きの人物が待っていることを俺はまだ知らない。

隣町からの援軍

やたらと賑やかな神田の相手を終え、剛の教室に向かう。顧問の確保などやるべきことは山ほどあるので、方針を決める会議をすることになっていた。四階建ての教室棟の一階すべてが一年の教室となっていたので迷いようはなかった。加えて初日から他クラスへの侵入をしようなど考えるものも居なかったようで、スムーズに移動を完了することができた。

摩擦を感じさせない新しい引き戸を開けると、そこには四つもの人影があった。四人は教室の中心で何やら立ち話をしている。一人は勿論剛である。後は色黒と長身痩躯と眼鏡。三人とも見たことはある上何らかのイメージがあるのだが思い出せない。教室の入り口でフリーズしていると、流石に剛が気づき声をかけてくる。

「おお、恭輔来たか。ところで覚えてるか？この三人」

「正直、名前は分からない。でも知ってる顔だな」

質問に答える、と。

「だろうな。キャおれッチャーならともかく外野手では名前を知らないのも仕方ないことだろう。ならこう言い換えよう、彼らは市山中野球部のレギュラーだった」

剛が返してくる。市山中とは隣町の中学で練習試合を何度もやった馴染みのある名前前で、俺にとっては分かりやすい説明になった。

「で。一応自己紹介は必要なのか？佐野」

色黒のきりつとした男が問うてくる。って……

「なんでお前は俺を」

言いかけたところで色黒に制止される。

「やっぱ、俺らから言った方がラクそうだな。俺は鎌田義哉（かまたよしや）。字は名簿でも見てくれや。中学の時はキャプテンだったよしや」。

た。んでその細長いのが、赤羽隼人（あかばねはやと）だ」

「よろしくー、バネでいいよお」

紹介を受けた長身が脱力感をともなつて応える。

「で、その眼鏡が陰山だ」

「……………陰山」

陰山は目線を一度もあわずに呟いた。まあそれで一応ここにいる人間の名前は把握した。しかし、如何せん志望動機がわからない。

「で、なんで倉浜くらなみ高校受けたかだったな。そりゃ、端的に言えばお前らがいるからだ。全国屈指の激戦区神奈川でもお前らと俺らが手を組めば、通用すると思つたしな。んで、橋上はなんで来ねーんだ？」

予想外の回答に言葉が詰まる。なぜ俺たち三人が倉浜を受験したことを知っているのか。そして問題なのは健太郎が目当てだということ。剛の方をちらつと見てみると奴も同じだったようで、気まぐすそに眼を泳がせている。

沈黙が続く。

「……………おい、まさかとは思うが」

「すまない。そのまさかだ。あいつは」

仕方なく、真実を告げようとする、

「ふざけんじゃねえ。それじゃ意味ねーじゃねえか」

またしても鎌田に割り込まれる。短く会話を切断されたので空気も悪くなってしまった。先ほどよりも息苦しい沈黙が漂う。

そんな空気を変えてくれたのは、意外な人物だった。

「……無意味ではない。佐野恭輔は本塁左打席から一塁到着までの最速タイム3・88秒という記録がある。メジャーのイチローと比較しても100分の18秒しか劣らない。尤も、イチローの記録は平均データであり、佐野恭輔は体格で劣るが。また大宮剛は走力以外のすべての面で野球選手としてすぐれており、今の状態でも全国クラス。義哉とバネの守備力もかなりの高水準にある」

予め用意された文章を読んでいるかのように陰山が喋りきった。彼がここまで饒舌なのも珍しいのだろう、赤羽も鎌田も茫然としていた。

静まっではいたが、さつきよりは数段マシな雰囲気だ。

それを利用して剛がまとめにかかった。

「そうだ、顧問の件だ。俺が明日職員室を訪ねておこう。恭輔は陰山が作ってきたくれた部員募集の張り紙を下駄箱の掲示板に貼っていてくれ。一週間後またここでミーティングをやるから今日は解散」

その号令に反発するものは居らず、そろそろと教室を後にする。

まあ俺にはまだ仕事が残ってるんだけど。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8183m/>

柱のない家

2010年10月8日14時35分発行